

奈良の一夜

四 丁

奈良は今更に僕の拙文を要する程の未知の地でない事はいふまでもない。町には旅館軒を並べ、青丹よし奈良名物が處々の店頭を飾る程のポピュラーな日本の名所である。實に外人の筆にまで紹介せられ居るのに、僕には未見の地であつて、この外人の紹介によつて夢の如くに知つて居つた。このネチーヴランドの一部を外國人の紀行に依つて初めて知つたとあつてはわれながら汗顔の至である。

京都を朝から午後まで休まず歩いた足で、關西鐵道で奈良へ著いたのは、午後の四時過、だら／＼上る奈良の坂町を何處か古風な旅舎はあるまいかと、そろ／＼南圓堂の下まで来てしまつた。繪や寫眞では毎度お目に掛つた五重の塔が見える。忽ちにパーソン氏の「日本の春」を思出した。あれは丁度櫻の咲く頃、五重の塔の前景には櫻花を點じてあつたと記憶する。今は荒涼たる枯木ばかりだ。兎に角に七堂伽藍の跡へと上つて行つて見やう。櫻がなくとも七堂伽藍八重櫻の昔が偲ばれる。日は既や暮れかゝる。枯芝の邊に遊んで居る二三匹の鹿が餌を求めて僕の方へ来る。夕風寒き古都の枯芝原に旅人の僕が頗る調和したやうにも感じられる。二匹の鹿を前景に奈良の町を見下して、遠く一株の連山が見える、手元の暗くなつたので餘儀なく鉛筆のスケッチに留めた。こゝで曾て武州の山村肝要村に獵銃の銘人猪虎を訪ふて圍爐裡邊に酒を暖めて得意の獵談を聞いた中

に、鹿の話のあつた事を思出した。その時に猪虎に贈られた鹿笛の事から、妮々と鳴く鹿の音に「づさころし」といふ吹方のあると聞いたことも思出した。「づさころし」には面白い癖がある。「づさ」といふのは木の名で、並立錯綜して居る幹が夜風に轢合つて音がする。これが丁度妻戀ふ鹿の鳴音に似て居るといふので、雌鹿がこの音をたよりにこの邊に憧れ來て、物をも食はずに寝て居て遂には死んでしまつたとある。こんな事を思ひ出して、秋ではないが、何となく物のあわれを感じつゝ、こゝを引返して、とある宿屋へと著いた。實は二階から五重の塔のスケッチの出来る處をと撰んだつもりで。

上へ上ると餘り座敷は奇麗でない。破れた火鉢に焚下としての火を入れて来る。首の曲つたやゝともすると心の出過ぎたがる臺洋燈が来る。これはやゝこゝに過ぎた幽禪メリスの小座布團が出た。茶を飲んで居ると、お風呂をお召しなさいといふから、宜敷といので下りて行くと、内の年寄が直近所に湯屋をして居るので、それへ案内しますとあるには一寸と閉口したが、甚だ疲勞れて居るので、一と風呂浴びて歸ると、直に膳が出る。膳部は頗る古風だ、ぶつ切りの鰯の刺身は可いが味は甚だまづい。嬉しかつたのは、名物霞酒に菜漬を井へ一杯持つて來てくれたのであつた。これをちびりながらに繪はがきを三枚製造した。陶然としたはよいが、一人旅の悲しさに、誰に氣焔を吐くよしもない。空しく酒氣を壁間に吹いて、飯を呼び、そゝ／＼に寢に就いた。

相當の茶代まではづんだにしては、催促せれば寐巻もくれぬ不仕末、寐具の綿のこつ／＼は、パーソンス氏ではないが、寝るのに骨が折れる程だ。しかし難有い事には前日からの疲労と露酒の力で、朝までぐツすりと寝込んだ。

翌朝小早く飛起きると下ではまだ漸く下女が起たばかり。其手を待ツて居ては何時になるか知れぬと、自分で二階の雨戸を操ツて五重の塔を寫生しやうとしたが、何となく氣乗りがしないので、鉛筆のスケツチとして、南圓堂の畔をやらうと、箱と三脚を持ツて一寸とそこまでと宿へいふと、朝飯は直に出來ますからお早くお歸りをといふ。そのつもりで出て行く。南圓堂の一部の鐵鈴が下ツて居て、朝の黃な空に對して一寸と面白い感じがしたので、一時間許で九ツ切りに水繪のスケツチをした。ワツシの乾く暇にはわたりの練堀の崩れた所などを鉛筆のスケツチなどして、仇に時間を消さない工夫。それもこの日の正午過に伊勢路へ向ふ心算であるから。

これをこそ／＼にして宿へ歸ると、何の事だ。また飯も出來ず、搗て加へて寢具もそのまゝであるのだ。しかも昨夜は客たるものは僕一人であるのに。暫くして飯を濟して、急速を尊ぶ處から春日神社から大佛までを俾て見物することゝした。例のかた／＼と音のする俚に乗る。車夫は草履ばきで、まづごろ／＼と曳出した。猿澤の池から初まる。車夫は案内者を兼ね居るから、一寸とそこへ止ツて、人皇五十何代の御世にと説出した。するとその側にも七八人の旅人を相手に猿澤の池を説いて居る

案内者が居た。旅人の内の一青年はあッばれな名文の紀行でもものさうといふのかノートブックを出して、眞面目な顔で筆記して居るのがあツた。これから上ツて、春日神社の一の鳥居、續いては公園の末の枯れた杉や藤蔓の工合、パーソンス氏の繪はこゝだなと合點かれる處もあツた。二の鳥居の處には鹿が非常に居る。尾籠な事だが僕は鹿の糞を初めて見た。兎の糞と大きくも色彩も同じだ。膽玉の小さい奴は線香のやうな糞をすると聞いた。して見ると鹿は小膽なけちな奴と推斷がつく。争はれぬものだなと考へる。

進むと繪はがきを賣ツて居たので見ると、寫眞版の外に水繪のもあツた。總じて惜しくもないものばかりだ。

有名な春日燈籠の盛に並んで居るのに驚かされながら、折々鉛筆スケツチに立留ツて案内者を驚かして、説明を折々うはの空に聞流して、社殿を通り抜けて、鹿角細工や奈良人形、鐵打物をひやかして、三笠山一名若艸山を見ては青ければ美事であらうと考へ、二月堂から修繕中の大佛殿等を瞥見した。松杉等の古木や建物の古び工合、流石に古都の面影が偲ばれる。ゆるりと一二週間をこゝに寫生に暮したい氣もした。しかし洋風の建物の處々にあるのは奈良とは甚だ調和しないやう感じもする。俚で宿へ歸ツて時間を見ると、伊勢路へ發する汽車にはまだ三四時間はある。これは更に徒歩で行ツて、何處かを寫生しやうと、またも春日神社の方へと足を向けた。俚では近いと思ふた道が、徒歩ではなかく／＼にある。漸く二の鳥居近くで、燈

籠の五ツ六ツ並んだ奥深い森に赤い鳥居がちら／＼見える處が面白かつたので、寫生にかゝつた。こゝも一時間許で。

昨日の曇りに引換えて今日は空風の大路に砂を上げて、満足に眼を明いては徒歩けない程である。これでは寫生には何とも致方がない。一時間餘を奈良停車場に列車待つ間に鉛筆を走らせて。(完)

弱 虫

S M 生

ある地方の中學卒業生、職を地方裁判所に得書記の役を拜命せり。後數日、管内に殺人犯あり、豫審判事に伴はれて兇行現場に出張す、死屍累々詳さに慘狀を極む、判事新書記に命じて形狀位置等を實寫せしむ、新書記在校當時圖畫を蔑視して、少しも勉強せざりしかば、因果は觀面如何に筆を下すべきやを知らず、さればとて職業柄其儘にもなりがたく、不得止曲りなりに圖取りを了れり。さて裁判所に歸り來れば、同僚待受居りて情況をきき、見取圖を開くに其線は慄へ形は亂れ殆ど圖を成さず、一生嘲つて曰く、『この新參書記初めての臨檢に死體を見て恐怖し、筆は紙にづかざりし



筆 助 之 誠 林 小

ならん、何等の醜態ぞ！、何等の懦夫ぞ！』と、新書記其畫學に拙なるを愬へて辯解大に勉めしも聽かれず、終に役所に於ては常に弱虫の尊稱を蒙るに至れり。茲に於て新書記大に憤慨し、更に初めより繪畫を學んで自由に實寫し得るの技倆を養ひ、彼等同輩を驚かし呉れんものゝと、先の中學圖畫教師の下に走り、頻りに鉛筆畫の稽古を初めたりといふ。(實話)

蛇の棲處

多くは裏白即ちシダ 又は隈笹の茂つてある處に棲む 木の洞の腐つた柔らかな處にも居る

抵抗性

赤いものを見ると蛇は飛掛つて來る 赤毛布緋の蹴出しなど大禁物 殊に婦人達は注意されたい 蛇は一寸でも觸ると飛び蒐かゝつて來るから なるべく驚ろかさぬやうにするに限る (趣味)

* * * * *